
真夜中のシンカイギョ

みずも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真夜中のシンカイギョ

【Nコード】

N7600A

【作者名】

みずも

【あらすじ】

5年生になる男子生徒に必ずやってくる「真夏の度胸だめし大会」。
草太もこの夏にととうとう、参加のキップを手にした。だがここである事件が起こってしまった。度胸試しなんてへでもない事件が、草太たちの目の前で起こったのだ。真夜中の線路に突如すがたを現した蒸気機関車。果たしてその列車の行く先は？目的は？夜空を駆けめぐり少年たちは、なにを見つけ、なにを手にするのだろうか。

プロローグ（前書き）

初ファンタジーに無謀にも挑戦し始めました。また架空の地名・建物・団体名で実際には存在しません、あしからず。

ブローグ

5年生の夏になるともらえる勇者のキップ。

キップを手にした勇気あるものは「度胸試し」の大会に参加するのだ。

町外れのうつそうと茂る雑木林の中を進むと、何百年も前に建立されたお寺が本当に息を呑むくらいにぶきみに現れる。

その寺に眠るご本尊様をたったひとりで真夜中の2時過ぎに拝むことができたなら立派な勇気と称えられ 勇者の称号が与えられるんだ。

もちろん大人たちには内緒な、子供だけの神聖な儀式だったりするってわけ。

それが毎年5年生の夏にやってくる特大なイベントだったりする。

いよいよこの夏、とうとうオレも戦いの舞台へと入場が許された。

参加は自由さ、逃げ腰で帰るくらいなら参加しないに限る。

でもって オレはもち参加しますよ、あつたり前さ。

クラスにいる例のひ弱なガリベン君と一緒にしてもらったら困る。

さあ、オレは今宵己の勇気を試すために、キップを片手に旅立つんだ。

プロローグ（後書き）

同じく連載中「二つの太陽」と違って明るくおちゃらけて書いていく予定です。

またご意見、ご感想お待ちしております。励みになり馬車馬のように働きます。

また本作品の登場人物紹介などHPで公開中です。お暇であれば目次下の作者紹介ページから遊びに来てください。

始発 1

「マジで!？」

上ずった大声を張り上げてしまったオレは、思わず握っている受話器を落としそうになってしまった。

「ちよつと草太、電話口でなに大声出してるの!？」

台所から母ちゃんがフライ返しをかかえ、子機で話しているオレの部屋に飛び込んできた。

「なんにもないって、んなことより母ちゃん何べん言えば分かるんだよ!ノックぐらいしろよな」

「まあ、草太が大声上げるからびっくりして来たんじゃない、あたしが悪いっていうの!？」

やばい、母ちゃんを怒らせしまった。まさに鬼の形相だ。右手のフライ返しで鬼の金棒にまで見えてきた。

ここは素直に謝ろう、今夜のこともあるし…。

「ボ、ボクが悪かったです、口答えしてすみません」

「やけに素直じゃない。気持ち悪いわね」

「失礼な、ボクはいつでも素直で純粋なお子さんですよ」

「怪しいわね、なにか隠してるでしょ。なにか変なことでも企んでないでしょうね？」

しまった逆効果かよ！ 見事なピッチャー返しをくらってしまった。

よけいに訝しげな顔つきになる母ちゃんに、ピンチ、ピンチだオレ！？

その時だった。神さまの慈愛の手がオレの元に差し伸べられた。

「あれっ、なにかこげる匂いがしませんか？」

ふと我に返った母ちゃんは火にかけられたまま置き去りに去れた、ハンバーグの存在を思いだし嵐のようにすごい勢いでオレの部屋から飛び出していった。

「あぶねえ、もうすぐで自供させられるところだった」

汗ばんだ額をひと拭いして、再び子機で話し始めた。

「わりい、悟る。もうすぐで柏木団地の鬼に殺されるところだった」

「なんだよそれ、鬼っておばさんだろ。だいいち柏木団地ってお前んとこの団地じゃん。地元だしさ、迫力ねえよ」

電話口の悟はオレのクラスメイトで、幼稚園からの付き合いで俗

にいう幼なじみってわけ。

なもんで、今夜に開催される『度胸試し』の大会に憧れ夢を語り合ってきた同志ってわけ。

「そんなことよりもさっきの話しに戻ってもよい？」

いかん、いかん。いつも話しがだらだらと脱線していくオレに悟が軌道修正をかけてきた。

「織田も来るらしいんだ、今夜」

「やっぱ本当なんだ。でも信じられねえ……」

その言葉をなんと聞こうが現実とは思えない。

だってあの“オダ”だぜ。

頭が良すぎて、決してオレたちとつるむこともなく、マンガじゃなくて小難しい本ばかり読んでる天才なオダ。

ちょっと顔がいいからって、芸能人のだれかに似てるからって女子から壮大な人気なオダ。

なんであのオダが来ちゃうわけ？

一番つまんねえっていいそうなオダが、オレたちと一緒に度胸試ししちゃうわけ？

オレは未だ信じられず、今夜の「度胸試し」がスタートする0時

を向かえるまで気もそぞろで

夕飯のハンバーグがどんな味だったかすっかり覚えていなかった。

始発 1（後書き）

次話なるべく早めに更新できるように、体にムチ打って頑張ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7600a/>

真夜中のシンカイギョ

2011年1月9日15時21分発行